令和１年度　幼保連携型認定こども園姫路東こども園自己評価結果

１．○基本方針

・安全で安心して通えるこども園の確立を目指しています。

・園児一人ひとりを大切にし、「丈夫な身体づくり、明るくのびのびした心を育てる」保育を目指します。

・社会性、協調性を基調として、生活習慣やしつけが身につく保育を目指します。

○教育・保育目標

「のびのびと遊び、豊かな心と身体を育てる。」

・ことば遊び、絵本の読み聞かせ等により豊かな言語を育てる。

・リズム遊びにより情操豊かな子どもを育てる。

・生活習慣の確立を目指し、自立する子どもを育てる。

２．令和１年度のテーマ

「報・連・相をしっかりする」

子どもたちが、安心してこども園で過ごすことが出来るように、職員同士がしっかりと「報・連・相」を

確実に行い、適切な援助を行うことを目的とする。

そのために 5W1H を正確に伝え、職員が互いに気遣いあえる関係を深めたい。

３．目標・計画の達成及び取り組み状況

評価項目	自己評価	評価理由と取組状況
保育内容の共通認識	A	○乳児保育 ・小グループ担当制を取り入れ愛着関係を構築する。 ・食事、排泄、着脱への意識づけをしている。
		○幼児保育 ・異年齢保育により相手を思いやる気持ちを育てる。 ・遊びや生活を通して人間関係や自然に係る楽しさを知る。 ・言語、体操、音楽、茶道等のステップアッププログラムを実施。
		○職員会、保育士会等の会議の開催 ・職員会議等を通じて意識の共有を図る ・職員間の情報周知並びに確認の機会を多く取り適切な対応を実施。 ・ヒヤリハット、事故についてその都度適宜委員会を実施。
保育教諭の資質向上	A	○専門性を深めるための研修の充実・参加 ・キャリアアップ研修、ことば遊び研修会、運動遊び研修会等に参加。 ・給食関係者研修会、食中毒・感染症研修会等に参加。 ・人権研修会、児童虐待防止研修会等。
		○目標の設定および振り返り ・月案、週案、個別記録、保育日誌の記入等により各目標、課題を振り返り、反省を活かした保育を実施するよう努めている。
保護者に対する支援及び情報提供	B	○子どもの成長の喜びを共有 ・おたより帳の活用、保育参観、行事への参加を積極的に促している。 ・担任保育教諭・保育士との個別懇談会を実施。
		○保育内容の説明 ・玄関にモニターを設置し、こども園や園児の様子等を公開。 ・保護者に、園だより、グループだより、給食だよりを通して保育園の情報を定期的に提供。
地域子育て	B	○こども園の機能の開放 ・延長保育、預かり保育を実施。

支援		○関係機関との連携 ・自治会との交流 （屋台蔵見学、獅子舞等の祭事の行事を通した交流） ・小学校との連携（運動会の見学　） ・消防署、地域消防団との連携 （ＡＥＤ使用講習、幼児消防団への参加） ・自治会、消防団との非常連絡網の編成
健康及び安全	A	○健康 ・健康診断の実施 （年２回の学校医、年１回の学校歯科医による検診） ・日常のプログラムを通して規則正しい生活習慣を身につける。 ・給食で、アレルギーを抱える一人ひとりのアレルギー食材とその反応時の様子を職員全員が把握し、給食関係職員と密に連携をとって適切に対応している。
		○安全 ・災害発生時の安全に備え、月１回の避難訓練を実施。 ・避難訓練・交通安全教室の実施並びに姫路市主催の防犯研修への参加。 ・虐待防止のため、身体的、服装等に異常が感じられる園児の視認と記録の実施並びにそれに伴う保護者との面談を実施。

４．今後の取り組むべき課題

保育内容の充実	・小グループ担当制により情緒の安定と愛着関係を構築する。 ・「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の三本の柱を育む。
小学校との連携	・５歳児やその保護者が安心し、期待を持って進学できるように小学校の行事に参加、交流する。 ・小学校との子どもの引き継ぎのための業務を密に行う。
子育ての支援の取組	・特別な支援の必要な子ども（外国籍、発達障害等を含む）に対して、適切な援助、保護者との情報交流を密にとりあう。

５．幼保連携型認定こども園姫路東こども園に対する総合的な評価

総合評価	開園３年目となり色々改善・努力をして頂いていることを感じています。 保護者からの意見や要望にも耳を傾け、子どもたちのために共に手を取りあう姿勢で運営されていることがよく理解できます。 小学校との連携もあり、入学に対する不安にも対応していただいて安心しています。 子どもたちへの熱心なご指導と細やかな心遣い、そして大きな愛情を日々感じております。 （令和元年度　姫路東こども園保護者会代表）
A	

※評価の表示について

A	全ての点で目標、課題が達成できている
B	目標、課題が達成されている
C	取り組まれているが、成果が不十分である
D	取り組みが不十分である